〔研修報告〕

# 北京外国語大学短期研修「燕京日記」

河野　隆（鷹之）

平成十二年度の短期特別海外研修で冬の北京に一ヶ月滞在した。大東大と姉妹校の提携を結んでいる北京外国語大学（略称は北外）との交流の一環だが、今、日録を繰って振り返ると、色々な失敗もあったが、実に楽しい有意義な一ヶ月だった。研究テーマは「璽印及び塼・瓦當の研究」なのだが、全く拘束がなく自由に研修できたことが何よりよかった。日本に居る時よりもゆったりと時間が流れるようで、色々なところへ出かけ、たくさんの人に出会い、夢のように一ヶ月が過ぎた。その北京での生活を日記風に綴って紹介しようと思う。

**十二月二十三日(土)**

一ヶ月日本を離れるとなると、その前に済ませておかなければならないことが公私ともにたくさん出て来る。何やかやでこの二週間程は完全に睡眠不足。横浜から乗った成田エクスプレスの車内でも、手紙三通と連載原稿を必死に書き上げ成田空港で投函、ホッとする。十四時五十五分のCA926便に乗り、北京に十七時三十分着。通関手続を終え出迎えゲートに出る。北京外国語大学の日語系教授、于日平先生が迎えに来ると聞いていたのだが、それらしい人はいない。二個のトランクを押して雑踏の中をウロウロしていると、タクシーの客引きがしつこくつきまとう。「不要」を連発して断る。「有人来接我」のはずがどうしたのだろう。当惑顔で茫然と立っていたら、しばらくして流暢な日本語の于先生が現れ挨拶される。予定よりも二十分程飛行機が早く着いたようだ。于先生は筑波大の大学院を出て、大東大の非常勤講師もしたことがある方で、実に日本語がうまい。

タクシーで四十分、北外の西院に到着。専家楼の一室に案内され、使用上の説明を受ける。少し古いけれどもゆったりした造りでくつろげそうな空間である。大学構内の日本食堂〈聖太郎〉で遅い夕食をとり、ちょうど来遊中の中文のO先生と明日の打合せの為、タクシーで王府井大飯店まで出かける。再び北外に戻ったのは十一時過ぎ。タクシー代を日本円で払おうとしたら人

民元でなければダメだと運ちゃんが怒り出す。門衛に二十元借りようと交渉したが、これもアッサリ断られ、途方に暮れた。〈聖太郎〉が十一時半まで営業するということを思い出し、そこで千円を換金してもらって何とかタクシー代が払えた。初日から色々あったが、これが一人旅のおもしろさだと自分に言い聞かす。今日は大分興奮して眠れそうにない。北京の夜はやはり相当寒い。二時頃就寝。

**十二月二十四日（日）**

七時起床。西院門外で油条（ねじり揚げパン）、肉包（肉まん）二個、豆餡火焼（焼きアンパン?）、煮鶏蛋（ゆで卵）を買って来て朝食にする。全部で二元五角（日本円で三十五円）、一回ではとても食べきれない。

九時に王府井大飯店のロビーでH君（大東卒、北京中央美術学院に国費留学中）と待ち合わせ、中文のT先生とともに行動開始。途中でO先生とも合流する予定である。古玩城（近年出来た骨董品のデパート）→古匋文明博物館（土をテーマにした古文物の博物館、路東之館長個人の収蔵品で古匋・瓦當・塼・封泥などを陳列。個人経営の博物館としては中国で初めて認可された）→琉璃厂（有名な文墨街）→大栅欄（浅草に似た庶民の街）→歴史博物館（天安門広場に面する一大博物館）→高馬収蔵品市場（骨董市、北京五輪誘致の為、間もなくすべて取り壊されるという）と実に精力的に見て回る。一人では絶対にこんな強行軍はしない。午後の歴博では《珍蔵特展》を開催中で、〈虢季子白盤〉他青銅器の名品、優品がズラリと出陳され、青銅器だけで予定の時間がなくなり、他は走馬看花、最後に見た唐美人俑は珍しいものだった。

この日最後に回った高馬収蔵品市場では、古匋の優品に出会い、T先生は石器時代の土偶に完全に魂を奪われ、うめき声を上げて見入っていた。

夕食は地陪の朱虹さんの紹介で地安門の〈満福楼〉というお店でシャブシャブを味わう。老北京の行く店だそうで安くてうまい。寒い夜は鍋料理が何よりである。

帰路、北外門外の花屋で球根の水仙と水盤を買い、自室の窓際で育てることにした。

**十二月二十五日(月)**

今日は二十世紀最後の聖誕節である。連日の興奮からか、疲れているのに五時半に目が覚め、することがないのでしばらく字を書く。初世中村蘭台五十四歳所刻の木印の辺款でおもしろいものがあったので、筆で試みに臨書してみた。蘭台翁はやはりすごいなとあらためて思う。

九時、一人で再び琉璃厂に行き、栄宝斎・戴月軒・古籍書店・印痕楼をゆっくり廻り、筆・墨・紙・印泥・絵具等を買う。今日から中国で出会った珍しいものを水墨画に描いて残そうと計画を立てる。

十四時三十分、外事処（短期研修の受入れ窓口となった部署、本学の国際交流センターに当る）を公式訪問し、処長・副処長に挨拶する。皆さん好意的で専家楼の小姐や阿姨も親切に対応してくれる。

さすがに連日の疲れが出て二時間程昼寝。夕方、近くの市場に行って蔬菜を五、六種買って帰り、夕食後それらを描いて北京での生活実感を具体的な形に表しておこうと取り掛かった。当然うまくは描けないが、その時々の心情が筆墨を通して流露すればよいのである。巧拙を超えて楽しむ心が一番大切なのだと自分自身を励ます。半切四分の一前後の大きさに十数枚描き、題字を書き入れ、最後に印を押す時にはすでに十分文人の気分である。〈小神仙〉と題した水仙は納得の出来映えだった。

**十二月二十六日(火)**

今、《千年書法大展》と銘打った展覧会が故宮の絵画館と中国美術館の二会場を使って開催されている。

故宮では、宋～元の尺牘や横巻が陳列されていた。北宋の蘇・黄・米の三大家をはじめ名品がズラリと並ぶ。ことさらな書き方はしていないのに目に映る印象は濃い。特に黄庭堅の〈草書諸上座帖巻〉は〈李白憶旧遊詩巻〉に似た作風だが、気韻生動の一つの姿を示していて息を呑んだ。また、元の泰不華の玉筋篆は初めて見るもので、名さえ知らなかったが、篆書が廃れたこの時代に、李陽冰や徐鉉・徐鍇の伝統を受け継いだこんな篆書の名手がいたとは驚いた。いつの時代にも一筋の地下水脈のように、説文や小篆にひとかどの見識を持つ人が存在するのだということがわかり、中国の伝統の厚みの一端を見る思いがした。

一方、中国美術館では、明・清～近現代の条幅を中心に名家の作品がズラリと並べられ、圧巻であった。これだけの質量を一堂に鑑賞できる機会はめったにない。世紀をまたぐ特別企画なのだが、同時併催として、《国際書法名家邀請展》があり、中国・日本・韓国の現代の名家（物故者も含む）の作品も多数紹介されていた。書道の国際交流の一つの姿が映し出され、中・日・韓の表現の違いも感じとれて意義深かった。さらにもう一つ《全国第八届中青年書法篆刻家作品展》は全部で五百点位はあっただろうか。大きさは様々で、八尺×六尺位の大作もあり、軸装が中心で横披が交じり、額装は少ない。日本で言えば日展に当るような展覧会か、入選レベルはかなり高く、入選・入賞はどこへ行っても通用するステータスになっているようだ。中年の上限は何歳なのかうっかり聞きもらしたが、全体に熱気のある作品が多く見られた。

しかし、こういった全国規模の公募展も八回目となると、有力な指導者に倣った作が何系統か見られ、かつて日本が歩んだ公募展の道を、中国も辿るような心配が脳裏に過る。組織化が進む程、作品の類型化も進む現実は何とかならないのかと思う。

《千年書法大展》という世紀のイベントを企画、運営しているのは四十代後半から六十代前半の中堅有力スタッフである。彼等の指導力でこれからの中国の書法・篆刻界も進んで行くのだろうが、中国の現況にかつての日本の姿がダブって映るのだった。

**十二月二十八日(木)**

朝食後、日本の出版社に送るファックス原稿を書き、留学生楼に行って送信。専用テレホンカードを使うのだが、ホテルからかけるのと違いなかなか面倒である。暗証番号をいくつも押してようやく国際回線につながる。自宅に電話するには三十数回指示通りに押さなければならない。要領を呑み込むのに二、三日かかった。

十時半、昨日に続いて故宮を訪ね、《千年書法大展》の特別展を鑑賞する。ツアー旅行ではこんな余裕はまずないが、今回の研修は一人で拘束されるものが何もないので、何回でも足が運べ、ゆっくりと欣賞して心に留めることができる。帰路、養性斎という茶館で碧螺春という緑茶を頼み、小一時間悠然と過した。こういうのんびりとした気分は、日本ではあまりないなと思う。茶館の前庭には龍爪槐というおもしろい枝ぶりの槐樹があった。別に蝙槐とも呼ぶそうだ。いかにも中国的で、日本風の庭園には絶対に合わない奇妙な雰囲気が、故宮の中の養性斎の前ではやはりこれだと思わせるものだった。

北外に帰る途中、紫竹橋近くの芸術博物館に寄ったが、特にこれといったものなし。少し距離はあるが、歩いて北外まで帰った。

夜七時からは、北京市内の専家が招待されて保利大厦劇院で〈胡桃夾子〉という芭蕾を鑑賞した。原作ストーリーをよく知らないが、大道具・小道具が皆中国風にアレンジされて妙な気分。日本にいたらまず行かないのだが、それなりに楽しめた。たまたま隣席に座ったT先生は同じ北外の日語講師。幕間に面識ができ専家楼の住人で唯一の知り合いとなる。杜徵麟老師に水墨画を習っておられ、篆刻にも関心のある方だった。帰りのバスの中では色々な北京情報を得た。

この夜、〈燕都歳寒蔬菜二十種〉完成。次は五十種描くことを目標にする。

**十二月三十日(土)**

八時起床。昨晩の残りで早飯を済ませる。十時、来京の折、于先生に頼んでおいた日語系の学生二人が専家楼の部屋を訪ねて来た。徐君は紹興出身、好奇心旺盛で人なつっこい。孫さんは、北京人で落ち着いたしっかり者の印象。北外の日語系の中には、早組と遅組とがあり、早組は中学段階から日本語を学び、大学入学時には文法的なことなどかなりマスターしている。大学では語学レベルを上げることはもちろんだが、日本の歴史・文化・政治といった方面の理解を深め、日本事情に通じることを目指し

て学習する。遅組は大学で日語を始めるクラスである。徐・孫両君は遅組の二年生。教科書を見せてもらったが、かなり難しい内容で、日本人が中国語を学ぶ時のレベルとは較べものにならない。私は中国語で話し、彼等二人は日本語で対応するという変則的なレッスンが始まった。中国の大学生の生の生活の様子が彼等の話しの中で浮び上り、興味や関心が日本の大学生とあまり変らないということに少し驚いた。流行のファッションや音楽にも敏感で、日本の芸能界のこともよく知っていた。学内の規制も以前程やかましくないようで、私の古い認識を改めなければならないことが多々あった。昼食は、彼等がよく行く東院の第三学生食堂で二人におごってもらった。ご飯とおかず二品、量が多くてとても食べきれない。

午飯後、燕興市場でまた中国の蔬菜を数種買って帰り写生。描き終った蔬菜はT先生に届け、今晩出発する小旅行の報告をした。

晩飯は昨日買って来た粽子二種と水餃で済ませ、タクシーで北京站に向う。北京のタクシーは運転手の周囲に柵があり、防禦されていて異様な感じを受ける。日本では一人なら、後部座席に乗るが、中国では助手席に乗る。留学中の日君に前に座った方がいいですよと言われて、それ以来、運ちゃんの右横に座るようにした。確かにその方が話しやすい。会話の実地練習という点では、狭い車内は大いに活用しなければもったいない。徐・孫両君を除けば一番よく会話をした相手はタクシーの運ちゃんだったのかも知れない。タクシーの運転手はよそ者にはさせないそうで、すべて北京の人。なぜだと問うと、よそ者は悪いことをするが、北京の人は信用できるからだという。老北京の運ちゃん達は皆北京口音でアル化音が多い。一ヶ月の間に何十回とタクシーを利用したが、色々な運ちゃんがいて結構おもしろかった。

二十一時に北京站に到着。二階の候車室は大きな荷物を持った人でごったがえしている。改札口が開くまでしばらくここで待つしかない。缶ビールとつまみを買って、二十一時五十七分発の錦州行きの軟臥車に乗り込んだ。上下二段四人で一部屋のコンパートメントで、上車する時に自転車の鍵のような金物プレートを渡される。同室はコルゲート歯磨の北京支店で働く三十代の女性。三十分程話しをしたが、東京に住む私の従兄の奥さん（上海人）の話しになった時、相手の様子がチョット変り、急にしゃべらなくなった。何か微妙な国民感情に触れることがあったのか、気まずい空気が狭い車内に漂う。ビールを飲んで寝た。

## 十二月三十一日(日)

二十世紀最後の一日、夜明け前の六時三十分に遼寧省の錦州に到着。老朋友の王丹氏（西泠印社社員で書・画・篆刻を善くする）が、凍てつくホームで出迎えてくれた。五年前、王夫婦が我家に来て年越しをしたことがあったので、今回は是非来てくれと昨秋上海で会った時に誘われていた。やはり北京より寒い。家は最近出来たばかりの高級マンション、エレベーターがないの

で七階まで昇るのはチョットきつい。中に入ると七、八階ぶち抜きの特別仕立てで、趣向を凝らした造りになっていて、壁面には五、六米の長条幅が楽々と掛けられる。書斎もゆったりとして、篆刻は窓辺の小机、書画の制作には中央の特大立ち机がしつらえてあり、主人の意向がすべてに尽された好ましい環境である。大東大の卒業生で錦州師範学院に留学中のKさんに電話して王氏宅に誘う。彼女も部屋に入るなりしばらく茫然として室内を眺めて、言葉も出ない様子だった。

昼前、土、日だけオープンする古文物市場を散策。凍結した道路の両脇に陶磁器・古書・貨幣・銅器・玉器等種々雑多なものが勝手に並べられ、買売されている。漢鏡とおぼしき物を王君が買ってプレゼントしてくれた。彼は明代の筆洗を手に入れた。

午飯は〈天上人間菜館〉の二階の一室で、王君の老師や友人が三三五五集まって来て、歌も交えてにぎやかに交歓し大いに盛り上った。その後、遼代に建てられた廣済寺の磚塔を見学。さらに、芸術喫茶のような店に入り、書画をしばらく鑑賞した。夕刻、今度は〈万家灯火飯店〉に王氏夫人の大学時代の同級生が参集して総勢十四名、それぞれの家庭の子供達は別のテーブルに集まり、いつ果てるとも知れない世紀末の大宴会が始まった。この日集まったメンバーは昼も夜もよく食べ、よく飲み、よく話し、よく楽しんだ。中国の人達の活力の源泉はこれなのかと思う程、大陸的で大らかな長い夜だった。

**一月一日(月)**

八時半起床、王君一家は昨夜三時頃まで大いに発散したとかでしばらく起きて来ない。窓の外は新世紀を祝うが如き瑞雪が降り、景観が一新、忘れられない年明けとなった。王君が用意してくれた宜興の紫砂で作った印材に〈王丹〉〈裕子〉〈子高〉の三種を布字して即興の陶印制作。素焼も何もしていない状態で、非常に壊れやすく意の如くにならない。焼き上がったら送ってくれるという。そのうちにKさんもやって来て、新春の遅い朝食となった。

午後、錦州師範学院を訪ね、鉄東市場と杭州街市場を見て廻る。北京・上海の大都会は爆竹や花火が禁止されているが、錦州では雪の積もった路上のあちこちに爆竹を売る屋台が出ている。新歳の伝統的な風物として、水墨画にも爆竹がよく登場し、趙之謙や斉白石の画で見覚えがある。また、北京に留学中の西川先生が描いたものも見たことがあったので、早速二、三種買って帰った。これを基に王君と二人で合作しようということになり、私が爆竹を彼が水仙と打ち上げ花火を描き、半切一枚の中におさめて、錦州来遊過年の記念とした。さらに、王君の梅花図横巻に〈偶梅居遺興〉の題字を小篆で書くように請われ、表具の済んだ巻頭の冷金箋に緊張の裡に何とか書き終えた。段々字が大きくなってバランスが少し乱れたが、これも実力、いたし方なし。こんな経験も客中なればこそと思うことにした。

夕食は一家総出で作った餃子を賞味し、渤海産の魚貝類が山程出てきた。王夫人・宋月秋さんの料理は実に美味い。丸二日王

氏一家の熱烈歓迎を受け、多くの人々に出会った錦州は厳しい寒さだったが、心温まる思い出が多い。二十時五十七分の火車で北京に向った。

**一月四日(木)**

十時、昨日に続いて徐・孫両君が来訪。今日は二人に篆刻を教えることになった。二人とも今まで刻ったことはないという。やり方を実演して説明し、最初だから布字した印材を渡し、印刀を貸して宿題にした。次回どんな風に仕上げて来るか楽しみである。

中国の一般の学生にとってみれば、書や篆刻といった伝統的な文化は生活に無縁のもので、教育の中で取り上げられる機会も全くないそうだ。だから、最初に私の部屋に来た時から、机上の印材や篆刻関係の用具には非常に興味を示し、色々質問も受けた。自国の伝統文化の一つを、日本の人に教わるというのは奇縁といえよう。物を作りたいという欲求は誰にでもありながら、そういう環境やチャンスに二人とも今まで恵まれなかったということなのだろう。

午飯後、真覚寺境内にある石刻博物館を苦労して訪ね当て、券を買おうと申し出ると、今年一年間休館だという。日本からわざわざ来たのだから、チョット様子だけでも見せてくれと頼んだが、全然ソッケない。縁無き衆生には我関せずという態度に中国ではよく出くわす。

それとは少し違うが、ある日、換金しようと思って北外門外の西三環北路を南へ歩いて銀行という銀行に入るがどこも断られ、あの銀行へ行けとか、あのホテルなら大丈夫とか言われ、たらい回しにされてほとほといやになったことを思い出す。ドルは一般の銀行で簡単に換えられるのに、日本円は世界市場では通用しないことがよくわかった。ちなみに中国銀行ならどこでも換えてもらえる。後で知ったことだが、北外門外を北へ歩けば二分位の所に中国銀行があったそうだ。二時間近く歩き回って最後に入った中国商工銀行がなぜ換えてくれたのか、いまだに不明である。

夕刻、Kさんから電話があり、北京に来遊中のNさん（大東卒）と二人で部屋に来たいという。三人で近くの火鍋の店に行き、熱つ熱つの鍋料理を堪能した。

専家楼の阿姨が貸してくれた珍しい蔬菜十種を二人が帰った後、十時頃から描き始め、一時過ぎにようやく終る。これで半切四枚に四十九種となった。まだ描いていない蔬菜が十四、五種はありそうなので目標を六十種に置き換えることにした。

一月五日(土)

七時五十分発の特快で天津へ一日旅行に出る。K・N二人の卒業生と一緒である。二階建の火車の軟座車、一時間二十分で天津着。まず天津芸術博物館を訪ね、《二十世紀中国書法回顧展》を観る。呉昌碩、康有為、于右任をはじめ、この百年で名を残した著名作家五、六十人の作品が並べられていた。この特別展の他に常設展示もあったが、印象はうすい。

午飯は、有名な食品街を訪ね、〈狗不理〉の包子二種（猪肉・三鮮）を味わう。旅の楽しみの一半は土地の名物料理である。想像していたよりも大分小粒、一口サイズだが中から肉汁がジワッと出て口中に広がり、なかなかうまい。

食後、これも天津名物だと専家楼の小姐が教えてくれた〈麻花〉（カリン糖のようなお菓子）を数種買い、専家楼の皆さんへのお土産にする。

この日は寒気がことの外厳しく、骨に浸み入る程にこたえたが、古文化街の通りなど外はもちろん屋内も凍えるようで、それでも中国の人は文句も言わず外で働いているのを見ると、温暖な島国の日本とは鍛え方が違うのかと完全に脱帽してしまう。

天津は道路が狭いので交通事情も悪くすぐに渋滞する。午後、歴史博物館に行く為タクシーに乗ったが、勝手に頼みもしない自然博物館へ行き、歴博は今やっていないという。乗る前からチョットうさん臭い運ちゃんだと思ったが、案の定そうだった。Kさんが自然博物館の窓口で確認すると、歴博は開いているという。歴博に着くのにえらく時間と金がかかり、雲助運ちゃんのせいで天津の印象がすっかり悪いものになった。苦労して辿り着いた歴博だったが、特にこれといった展示品はなく、ただ近現代の著名な人物の臘人形の生々しさだけが妙に記憶に残る。

天津は特別区の一つのはずだが、上海・北京・深圳などの年々変って行く大都市に較べ、何となく立ち遅れの印象があり、影がうすく感じられた。

一月八日(月)

二日前に降った雪が溶けないうちに、また雪が降って来た。タクシーが乗車拒否してなかなかつかまらない。十時半にH君と落ち会って、中央美術学院の書の講座を参観する予定がどうも間に合いそうにない。北京のタクシーは雪が降ってもタイヤを取り換える様子もないので、トロトロ走るか、安全な道を選んで大回りするかになってしまう。三十分も遅れてようやく彼に会えた。現在、間借りしている仮教室を訪ね、劉彦湖先生の書法の授業を観せてもらった。留学生や進修生が思い思いの古典を臨書していた。ペルーからの留学生が米芾か誰かの草書を流暢に書いている姿はやはりビックリした。劉先生が中鋒による点画の効用について解説され、線の中程に墨が濃くなるように運筆できなければいけないと言われていたことが印象深い。それも、篆・

隷ではなく黄山谷風の行書の臨書に対しての指導の場面であったので、おやと思い新鮮に受け止められた。劉先生は四十代初の方で、エジプト文字の研究で博士の称号を持っているという。はったりのないしみじみとした人物だった。都合がつけば十八、十九日にもう一度、今度は北外で会いましょうということになった。

午飯後、地下鉄を乗り継いで西単に行き、民航営業大廈で十四日の杭州行きの飛行機の切符を買う。その後、隣接の北京図書大廈で書・篆刻関係の出版物を見る。日本では目にしない新刊の色々なシリーズ物がかなり出ていて、印刷・装幀も数年前に較べて数段良くなって来ている。現代の若い世代の作品集など、新しい企画の出版は次のジェネレーションへの期待から生まれたものか、日本には見られない大胆さと柔軟さがありそうに思えた。

**一月十日(水)**

午前中は小印をいくつか刻る。塼文の雰囲気を取り入れた自用住址印も遂に仕上げた。今の家に引越して間もなく字入れしておいたものだが、気がついたら五年も経っていた。造像記風や端正な隷書でもいずれやってみようかと思う。

午後は雍和宮の近くの首都博物館を訪ねた。ここは清末まで国子監のあったところで、夥しい碑が林立している。百年程前、甲骨文の発見の立役者になった王懿栄は、この国子監の祭酒の任にあった人である。館内は人気も少なく高い針葉樹の間を尾の長い綺麗な鳥が飛び交っていた。東西に展示室があり、規模は小さいがスッキリと陳列されていたので、一つ一つ丁寧に観て回った。西展庁には明清の書画があり、董其昌と王鐸の横巻が見事だった。首都博物館は古銅印の収蔵で知られ、以前、小林斗盦先生の監修で現鈐本の印譜が出て、私もかなり無理をして一部購入した。小林先生の選定は確かなものだったが、印泥が少し軟らかめだった為に、肝心な印影がややダブついていたのが惜しまれた。陳列品中に古印が全くないので問いただすと、次に来館の前に連絡してくれれば手配するということだった。そのうち責任者の劉暁蘭女史が現れ、名刺を交換すると、大東文化大学は十八年前に嫁いだ姉さんの家の近くだということで、言伝てを頼まれ、好朋友のK弁護士にもよろしくと押しつけられてしまった。

帰路、北京図書館に寄って書画篆刻の一般図書のコーナーをザッと見て回る。借り出したい本があったので申し出ると、登録してカードを作らなければダメだとのこと。面倒な申し込み書に記入し始めたが写真とパスポートも必要なことがわかり、今日は無理だと諦めて帰ることにした。

西三環北路に面した中国書画研究院にも立ち寄ってみたが、特にこれといったものはなし。

夜はT先生が来て、篆刻を教えてもらった御礼だと言って、徒歩十分程の〈川楽園〉で火鍋を御馳走になった。火鍋に出て来た〈金針菇〉と〈鶏毛菜〉の二種の蔬菜はまだ描いていないので明日から市場で捜さなければならない。

## 一月十一日(木)

八時過ぎに起床。午前中は霧のような雪。専家楼の自室で四顆程印を刻る。

十三時三十分、西院門前で待合せた孫・張両君と一緒に《中国国宝展》を観に行く。張君は瀋陽の人で、先日、徐君が印を刻ったのを見て自分もほしくなったそうで、先日、徐君が連れて来た同じ日語系二年生である。長身でサッカーが好きだと言っていた。国宝展は昨年東博で特別展観されたものとほぼ同じだそうだが、〈中華世紀壇〉という新しく出来た、各種のイベントが行われる施設の中の芸術館で催され、六十元という非常に高い入場料ながらたくさんの人が参観していた。上古から唐代までの色々な分野の逸品が、鑑賞しやすいように解説や配置などにも十分配慮して飾られていた。中でも印象的だったのは、漢墓から出土した金縷玉衣のミイラで、中国人の玉への信仰というか執着というか、異様なまでの玉への思い入れには、美醜を超えて何かうす気味悪さを覚えた。

また、芸術館に入る前に円筒形の大きなドームがあり、その内壁には歴史上の著名な人物（殷の紂王や孔子・秦の始皇帝など、現代は鄧小平で終っていたと思う）がレリーフ調に彫刻され、一周すると中国の歴史を築き上げた主要な登場人物がすべて観られるようになっていた。屋外にはシンボルマークのゆっくり回転する大きな日時計があり、そこから真南に北京西站を望む地上には、幅二米半程の浅い水路があり、その水の底に特殊金属で鋳造した中国七千年の歴史年表が、二百米に亘ってつづられているのは壮観だった。この日も零下六、七度位と冷え込みが厳しかったが、水面は凍結しないような作りになっていた。

十七時、王府井の東安市場の入口で、徐君と合流し、〈不倒翁〉の伝統的な人形を捜し歩いたが、もう作り手がいないのか、どこにもなく誰に尋ねてもわからなかった。

晩飯は三君に感謝と惜別の意を込めて〈全聚徳〉の北京◎鴨を御馳走した。八宝茶を注ぐ長嘴壷の妙技は錦州でも見たが、写真に撮ると言ったらポーズを作ってくれた。が、ユックリした動作ではうまく行かないのだそうだ。奥のテーブルでは中国人が激しい口論を戦わせていた。

三人は春節前後の寒假で、徐君は紹興へ、張君は瀋陽へ帰郷するとのこと。私も十五、六日頃に紹興に行くかも知れないので、都合が良ければ又会おうと徐君に伝えた。

その夜、北外に戻り東院の彼等が生活する学生寮を見せてもらった。一室六畳位の広さの中に二段ベットで五人が共同生活し、プライバシーはほとんど保てない状態である。自室内では勉強は難しいと聞いていたが、なるほどと思う。学習は夜十時まで開いている図書館か、自習室でするのだという。

自室に戻り、東竹先生に紹介していただいた文物研究所の胡平生氏の自宅に電話して、明朝伺う諒解を得た。

**一月十二日(金)**

前夜、北京市内の詳細な地図で文物研究所を調べたが、最近移転した為載っていない。地址と電話番号はわかっているので、四環路の降り口を間違えなければ心配ないだろうとタカをくくった。路面にまだ雪が残り、あちこち凍結しているので、一時間は余裕を見て早めに出発。大体近くまで来たなと思った地点で一度タクシーを降り、どこか適当なところで場所を尋ねようと見回すと、すぐ近くに郵便局があり、まさに渡りに舟だと思った。入口近くで〈賀年片〉(日本と同じ抽籤で景品が当る年賀状)を売っている特設台の若い二人に尋ねるがよく知らないらしい。奥の方に何度か確認に行き、しばらくして別の一人を連れて戻って来た。その人が言うには、ここからタクシーで更に十分位東だそうだ。その人は親切にも地下道を通って道路の反対側まで案内してくれ、タクシーの運転手にも場所を指示してくれるのだった。しかし、三十分位捜してもそれらしい建物は見つからない。運転手も道々通りがかりの人に尋ねるがラチがあかず困惑している。昨夜の胡先生との電話で聞いた場所とはどうも違うと思い、運ちゃんに元の位置まで戻り、近くなったら少しゆっくり走ってくれるように頼んだ。それから十五分後、中国文物研究所の八階建てのビルを発見、何と郵便局から歩いて二、三分の所だった。

約束の十時半ちょうどにたどり着き、胡先生の会議が終るのを別室でしばらく待つ。十一時過ぎに面会できた。東竹先生からの紹介状を渡し、来意を告げ、昨夜刻った石印をプレゼントした。早速所内の何個所か案内してくれ、何人か紹介してくれた。その中に文物出版社社長の蘇士澍氏の夫人もおられ、研究所で発刊している《文物天地》誌をいただいた。胡先生は東竹先生とは旧知の仲で、度々来日しているとのこと、日本のことも北から南までよく御存知だった。午飯は近くの火鍋城で御馳走になり、火鍋のタレは胡麻ダレと辛子ダレを半々にするとうまいですよと教えてくれた。私よりも少し年上で、温厚篤実な人柄に接することができ、快い余韻が心に残っている。教養と文化を身につけた人が共通に持つ大らかさを感じさせる方だった。

**一月十五日(月)**

杭州来遊二日目、早朝五時半頃胃がムカムカして目が覚める。大分疲れもたまって来たのかも知れない。夜明前の街に出て、路上の水果店でリンゴを買って食べ、胃が少し落ち着いたので再び寝た。

九時半に老朋友の朱さんが迎えに来て、李阿姨の新しいマンションに案内してくれた。彼女が作る〈硃磦印泥〉は機械を使わない完全な手工で、品質を保つ為には一日に五両装一盒しかできないという。三種の主原料の吟味が十分になされた逸品で、夏冬の温度差にも対応するよう配慮されている。印泥の手工は秘伝が多いのでなかなか見せてもらえないのだが、朱さんの計らい

で特別に表演してくれ、さらに原材料も頒けてもらえたのは何といってもうれしかった。これがあれば、大学の授業時に具体的に話しができ、何よりも説得力が違う。

午飯は、望湖賓館に戻り、劉江先生（西泠印社副社長）、任道斌教授（中国美術学院）、余正氏（西泠印社理事）、沈潁麗女史（西泠印社社員）と老朋友の朱春城氏（西泠印社社員、浙江省書法家協会副秘書長）を招待して杭州料理に舌鼓を打つ。杭州は北京に較べ食材が豊富で緑が多く気候も東京とほぼ同じ。昼間でも零下、夜間は十五、六度まで下る北京から来ると、「上有天堂、下有蘇杭」の句は理屈抜きで納得できる。やはり日本人には江南の方が親しめるようだ。北京は人も車も多く、何となくせわしない雰囲気があるが、杭州はタクシーも少なく人もどこかのんびりしていて大らかに映る。春節を過ぎると梅が咲き、三月には西湖畔の桃や柳がきれになると杭州人は自慢気に話すが、確かに、寒いこの時期でも西湖は気持ちが落ちつく所である。

四年前に沈女史から印を贈られたので、三分角の小印一顆〈吟之〉を差し上げた。また余正氏は辺款の採拓法の翻訳を許可していただいたので、『大東書道研究』第八号と拙刻をプレゼントした。

午飯後、新設の印学博物館を訪ね、隣接の西泠印社もゆっくり参観した。印社内は小藪が苅り込まれ、各種案内表示も新たに作られて、以前よりも全体にスッキリと整理されて明るい印象になったようだ。印材の展示室が新しく作られ、竹閣の横には印廊が出来て、碑廊と向い合う形になっていた。

その後、朱・沈両人とともに西湖の景観を楽しみながら白堤をのんびり東に歩き、途中で別れて国際旅行社の章蔚女史を訪ねた。四年前のツアーの時に全陪をしてくれた方だが、帰りの杭州→北京の飛行機の切符を手配してもらった。「杭州はやはりいいですね」と話すと、きれいな日本語で「でも、少しノンビリしすぎています。」と答えたのが印象的だった。旅人には地上の楽園と映っても、競争の激しい企業の人から見れば、物足りなさを感じるのかも知れないと思った。

**一月十六日(火)**

朱さんに同道してもらってタクシーで紹興に向う。数年前に高速道路ができて一時間チョットで行けるようになった。十二時に紹興の書法家協会を訪問。出掛けに電話をした帰省中の徐君も来ていて一緒に行動を始めた。ところで、秦の始皇帝が建てた刻石は七種あり、現在は泰山の一部と瑯邪台が伝えられるのみで、他は史記に文言は載せられているが、石も拓も不明である。しかし、翻刻、覆刻されて当時の様子を伺うことのできるものもある。紹興の大禹廟の碑廊中央に、會稽刻石（清・嘉慶年間、阮元の題記あり）と繹山刻石（元・至正年間、西安碑林中の鄭文寶の重刻が有名）の二種が、一石の表裏に刻されているのがそれである。秦篆の実体を理解する時の二次資料として、一度は是非見ておきたいと前から思っていたものである。しかし、この

二碑は泰山刻石のような威厳や奥行はなく、李陽冰・徐鉉を受け継ぐ玉筋篆で機械的な造形はレタリング的要素が強い。だから筆力がなく形だけの存在感しか示せないのだが、清朝の金石家はこれらを学んで自分の様式を樹立したのである。鄧石如や孫星衍がそうであり、趙之謙は強烈な個性で取り組み、初めから完全に自分流にアレンジしている。

帰り際に堂内で古編鐘雅楽の学生八名による演奏を鑑賞した。楽器は編鐘、二胡、琵琶、揚琴、石磬で、茫洋とした遠くの景色を見ているような音色だった。

紹興は水路の発達した街で、雨に烟る昔ながらのクリーク沿いの景色などは、まさに一幅の絵のようで中国ならではの情緒が満喫できるところだった。しかし、今はクリークや旧い街並が埋められ、高いマンションが建って往時のおもかげはうすくなってしまって寂しい限りである。

市内の古玩市場で二、三軒拓本などを見、徐君と別れて、夕刻、杭州に戻った。

夕食は朱さん一家に招待され〈雲南美食園〉で雲南料理を賞味した。全体に辛口の味つけで、松茸に似た〈牛肝菌〉など珍しい食材に出合った。時々レストランの一角から高いきれいな歌声が響いて来る。見ると西双版納のタイ族の小姐四人が民族衣装を着て民謡を歌っている。朱さんに尋ねても歌の内容は全くわからないという。朱さんが馴染みの店長に日本から来たお客さんだと紹介してくれ、しばらくすると四人の合唱隊が私の目の前に並び、先程の歌声をもう一度披露してくれた。四人とも日本人に非常によく似た顔立ちをしていた。

食事後、朱さんのマンションにもお邪魔し、石印材等自慢の収蔵品を観せてもらった。呉昌碩若書きの行草の扇面は初々しい字で、非常に好ましいものだった。

夜も遅くなった帰り際に、是非食べて行って下さいと出された夫人手作りの〈元宵碗〉は、胡麻あんが上品な甘さで絶品だった。

**一月十七日(水)**

七時半起床、西湖が一望できる七階のラウンジで朝食をとる。会計を済ませ、トランクを一時預ってもらって、三時頃まで一人で西湖畔を散策することにした。保俶塔にも昇ってみたかったが、次の機会にして、白堤上の浙江省博物館に向う。常設の〈浙江七千年〉、〈常書鴻油絵美術館〉、〈青瓷館〉等を観て回り、旧い造りの〈文瀾閣〉に入り古銭や明清の家具等、他に参観者もなく静かにゆっくりと鑑賞できた。院内の梅の花もほころび、臘梅もあちこちに咲いて、江南の春は近いことを感じさせる。

最後に入った〈書画館〉では、《四任画派作品展覧》を開催中で、任熊・任薫・任預・任頤の海上画家の人物画・花鳥画が数

多く陳列されていて見事だった。任頤の生誕百六十周年を記念した企画だが、呉昌碩を描いた有名な〈酸寒尉像〉や〈蕉蔭納涼図〉の他に、楊見山と呉昌碩自身の題記のある五十歳時の小像が出品され、三種同時に欣賞できたのは幸運だった。

午飯後、博物館前から小舟に乗り、目の前に浮かぶ緑の小島に渡った。そこの茶館で龍井茶を飲んでいる時に、店の人からこの島は〈阮墩環碧〉（阮公墩ともいう）という名で、清朝の阮元ゆかりの島であると教えられ、これも金石の縁かと一人感懐を深くした。西湖十景は有名だが、最近それと別に新西湖十景というものが出来、〈阮墩環碧〉も入っているのだという。茶館から孤山を望むと博物館と並んで杭州料理の〈楼外楼〉があり、すぐその西側に西泠印社の月亮門が白壁の中にボーッと浮び上って見える。龍井茶を味わいながら、しばし俗界を忘れ仙境に遊ぶ心境に浸った。

隣りの小島〈湖心亭〉に移った後、白堤に戻り、中山公園から敬一書院をのぞき、孤山の尾根づたいに歩いて魯迅の肖像前に出た。一度ホテルに戻り、タクシーで蕭山空港へ向う。開通間もない高速道路は無人の野を行くが如しで、こんなに車が少なくていいのかなと心配になる程だった。新しい蕭山空港のロビーには石鼓文をアレンジした銅版が大きな壁面を飾っていた。十七時発が一時間程遅れるとのことで、お世話になった中国の人に年賀状を書くことにした。搭乗の手荷物検査で印泥の容器と中身が危険物と映ったのか、中の物を出して見せろと言われ少々慌てる場面もあった。モニターに白黒で映った様子は、確かに爆弾のようだった。

寒い北京に戻るのは少々気が重い。

**一月十九日(金)**

早飯後、外事処から書道研究所に「北外通信」No.3を送信。こちらで買った本や印材等重いものを船便で送ることにした。近くの郵便局に行き、三種の書類に記入して容量に合った専用の段ボール箱を先ず買う。局員が中身を細かく点検してしっかり包装してくれる。適当な箱や包装では受け付けてもらえないようである。専用の箱イコール局員の確認済み、というしくみになっているのである。不明な点などを何度も尋ね直し、二箱の手続きを無事終えるのに一時間以上かかった。三ヶ月以内には着くが、いつになるかは不明とのこと、二件で四六〇元かかった。

昼過ぎ、よく食べに行く〈客如鴻菜館〉で桂魚を買って帰る。鰭が鋭く黒い斑点があるのが特長で、形は鯛に似て精悍な顔つきの淡水魚。暗灰色に少し緑が入ったような体色をしていて、絵になる魚である。八大山人や揚州八怪もよく描いている。微妙な色合いや桂魚独特の風格をなかなか表現できず、何度描いても失敗ばかり。この魚は驚くほど生命力が強く、いつまでも机の上で跳ねてジッとしてくれない。発想を換えて墨色だけの濃淡でやってみると案外うまくまとめられた。続けて三枚描いて終り

にした。

この桂魚図の識語を入れるのに生態も知っておきたいと思い、東院の図書館に足を運んだが、寒假中の整理日で休館だという。夕刻、中央美術学院の劉彦湖先生とH君が来訪。部屋でしばらく話し、私の滞在中の作品などを見てもらう。〈燕都歳寒蔬菜六十四種〉など中国の人はこんな試みはしないのでおもしろいという。名のわからない蔬菜三、四種を教えてくれた。食事時になったので、昼間の桂魚をぶらさげて再び〈客如鴻〉に行き、〈清蒸桂魚〉という料理にしてもらった。もちろんこの日のメインディシュである。

部屋に戻りまたしばらく話しをする。印の側款の刻り方を質問したら、彼のやり方を実演して細かく説明してくれた。筆路の通りに刀を使い、筆意を損わないようにするのだという。江南とは違う言わば北京風のやり方らしい。劉先生から作品集や対幅、七分角白文印一顆を交流の記念にいただいた。帰り際、日本で一度展覧会をやりたい、二人でやってみないかと打診された。それもまたおもしろいかと思うので、二、三年後を目標に検討すると伝えた。

## 一月二十日(土)

北京の東南に、土日だけ開く骨董雑貨市の〈潘家園旧貨市場〉があるというので、のぞいてみることにした。かなり広いスペースの屋内外に節操なく書画骨董が並び、小雪の降る拙悪の状況下で（零下十度近かったと思う）、平気な顔をして商売をしている。寒さに弱い私などはもう物を見る気力もなく、こんな所に来たこと自体大いに悔んだ。早々に歩いて近くにある〈古玩城〉に行くが、ここは立派な建物の中とはいえ、見る物は皆寒々しい。タクシーに乗り真西の方角に移動して〈古匋文明博物館〉に路館長を訪ねた。今研修中三回目である。ちょうど昼時で、大観園の中の〈南来順〉でご馳走になる。〈東来順〉はシャブシャブの有名店で名を知っていたが、南もあるのかと問うと、北だけないとのこと。ところで、北京の庶民の生活を生きいきと描いた人気ドラマが夕方五時から毎日あり、多分再放送なのだろうが、専家楼にいる時は楽しみにしてよく観た。字幕が出る時の背景に、たそがれの故宮が映し出され、北京の現実とは違うまるで懐かしい夢を見ているような、何とも言えぬ情緒的な気分になるのが不思議だった。その主人公の張大民のことを話題にしたら、そのドラマの原作者・劉恒は彼の友人だという。そう言えば、路東之館長もともとは文学を志した人だということを聞いていた。彼は詩作を善くし、懐素に似た流麗な草書を書き、黄緑を主としたおもしろい人物画もこなす現代の文人である。以前、書法家の字より、文化の香りのする学者の字が好きだといっていたことを思い出す。路氏個人で経営するこの博物館は、テーマがはっきりとしていて、その方面の関係者は皆高く評価している。しかし、一般には関心が薄い分野なので、維持運営がかなり大変のようだった。我々も物心両面でできる範囲のバックアップを

したいと思う。

午後三時過ぎに王府井の一つ裏の通りにある中央美術学院の留学生楼を訪ね、H君の部屋で色々な北京事情を聞いていると、李玉明氏が拓本をかかえてやって来た。三十代初位の穏やかな語り口の人で、信頼できる筋から入手して来るようだ。大きな画磚の拓二枚と殷代の卣、漢の鐎斗のともに銘文のある立体拓を購入した。他にもおもしろいものがたくさんあったが、お金も残り少なくなって来たので諦めた。秦の権量詔版の拓が是非欲しかったのだが、今はなかなか手に入らないとのこと。H君は秘蔵の佳拓を持っていて、自慢気に見せてくれた。

日本から中国画系に留学中の三君も加わり、近くの飯荘に晩飯に出る。五人でビールを飲み、五、六品頼んで腹一杯食べても百十元（日本円で千五百円）。菜館に一人で行くと量が多くていつももてあますが、仲間で打ち揃って行くと色々な料理が楽しめる。中国には日本のレストランによくある定食といったものはまずない。中華料理はもともと何人かで集まって食べるように作られているのだろう。

## 一月二十一日(日)

午前中はいよいよ本格的に帰り支度に取り掛り、衣類等をまた海運で郵便局から送る。

昼からはT先生と琉璃厂へ行き栄宝斎の二階画廊の新春書画展を鑑賞する。中央美術学院の邱振中、徐海両先生の作品が見られた。韓美林という画家の猿の水墨画がおもしろかったので、男性か女性かと尋ねると、作品集を出して来てこの人ですと教えてくれ、あなたによく似ている人だと言われた。猫頭鷹（フクロウ）を三百種描き分けたその画集はおもしろかったので少し重たいが買って記念とした。東街の中国書店で篆刻の本を眺め、向いの戴月軒で馴染みになった李さんを相手にお土産にする〈狼毫勾綫〉という筆を二十本と銅鉤を買う。隣接の茶房は琉璃厂に来た時に必ず寄って一休みするのだが、いつも客がいないので小姐と会話をするのが楽しみである。彼女の話しはよく聴きとれるのでそのことを告げると、いつもはもっと速いですよと言われた。やはり気を使ってサービスしているのである。〈信陽毛尖〉というお茶を飲んでみたが、茶の産地や種類によって入れ方や味わい方が違い、茶器も違うことを色々丁寧に教えてくれた。

夜は御世話になった于、T両先生と会食。寝る前に専家楼の阿姨二人に明朝帰国の挨拶に行く。あと二日いれば春節だから、その様子を見てから帰ればよいのにとさかんに慰留されたが、心からそう思っているといった風情であった。楽しい世話好きな、昔の下町によくいるタイプのおばさん達で、昼間勤務する小姐達とともに大変御世話になった。

一月二十二日(月)

いよいよ帰国である。一ヶ月は夢のように過ぎた。五時頃起きて、二つのトランクにかろうじてすべて詰め込めたが、船便で別送していなければどうなったかと思うとまさに冷や汗ものだった。六時半頃小雪のチラつく北外門外でタクシーを待つが、例によってなかなかつかまらず、二十分以上かかってようやく空港までＯＫのタクシーに出会えた。

八時、北京空港で搭乗の手続きをする。二個のトランクは当然重量オーバーで、びっくりするほど超過料金を請求され、人民元が足りずまたまた大慌てをするはめになった。この一ヶ月間人民元で何度も苦い思いをしてしまった。ちなみに超重の場合は一公斤につき八十一元六角の計算である。

搭乗の手荷物検査では、やはり前科のある〈印泥〉で引っ掛ってしまった。

九時二十分のＣＡ９２５便で現実が待つ日本へ向った。